

「飯塚庸盟の碑」について

整理番号	題額	題額揮毫	碑記撰文	碑記揮毫
川口〇一	飯塚庸盟遺愛碑	安藤直行	安井朝康	成瀬清

鐫刻	撰文建碑年	住所	場所	備考
西直吉	明治三三・一九〇〇	朝日町	薬林寺	

一. はじめに

本石碑は、幕末から明治にかけて、樋爪村で寺子屋師匠、小学校助教として多くの子弟の教育に携わった飯塚庸盟の頌徳碑である。筆子塚であるとも言える。

○写真1 石碑正面



飯塚庸盟遺愛碑

● 題額

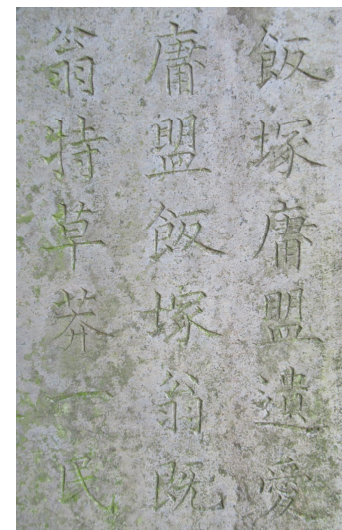
(正面)

■ 翻刻

二. 翻刻並に訳注



○写真2 題額(篆書体)



○写真3 「碑記」部分(楷書体)

●碑記

飯塚庸盟遺愛碑

從四位男爵安藤直行篆額

康盟飯塚翁既歿之十年門人故舊胥謀將不朽其德囑予敘之猗嗟翁特草莽一民耳問其職勛助教也問其俸則不出十金而門人故舊之惓惓弗能諉者是其故何也盖不朽者德也苟有德焉則雖至千百世可也予聞翁為人溫恭謙和淡於名利而厚於故舊其接子弟善誘不倦為一鄉所推服歿而十年遺愛在人比諸古所謂大官富商其生也顯榮其死也無聞者何啻霄壤君子成人之美若翁者其可無傳乎乃系之以狀曰翁姓飯塚名金太郎庸盟其號也武藏北足立郡樋爪村人家世業農幼而志趣不同群兒既長從小堤春盟學文學書法業成開塾教徒遠近來學者數百人明治五年令天下興鄉學翁以撰補助教在職十餘年恪勤如一日二十四年一月三十一日歿享年六十五葬于藥林寺先塋之次長男秀太郎嗣家建碑之舉發其端者曰山埦源太郎曰白根三藏皆翁之徒也可謂亦不負所學矣

明治庚子五月

安井朝康撰

成瀬 清書

西直吉鐫

*異体字等

○從 從。	○直 直。	○職 職。	○剿 則。	○能 能。	○盖 蓋。
○雖 雖。	○於 於。	○所 所。	○世 世。	○死 死。	○號 號。
○明 明。	○享 享。	○葬 葬。	○埦 埦。	○鐫 鐫。	

(背面)

*門人姓名(略)

■訳注

●本文 (いわゆる旧字体とし、一行毎に改行した)

◎題額

飯塚庸盟遺愛碑

◎碑記

飯塚庸盟遺愛碑。

從四位男爵安藤直行篆額。

康盟飯塚翁、既歿之十年。

門人故舊胥謀、將不朽其德、囑予敘之。

猗嗟、翁、特草莽一民耳。

問其職、則助教也。
問其俸、則不出十金。

而門人故舊之惓惓弗能諉者、是其故何也。
蓋不朽者德也。

苟有德焉、則雖至千百世、可也。

予聞、翁爲人溫恭謙和、淡於名利、而厚於故舊。
其接子弟、善誘不倦。

爲一鄉所推服。

歿而十年、遺愛在人。

比諸世所謂大官富商其生也。顯榮其死也。

無聞者何啻霄壤君子成人之美、若翁者其可無傳乎。

乃系之以狀、曰、

翁姓飯塚、名金太郎、庸盟其號也。

武藏北足立郡樋爪村人。

家世業農。

幼而志趣不同群兒。

既長、從小堤春盟、學文學書法。

業成、開塾教徒、遠近來學者、數百人。

明治五年令天下、興鄉學。

翁以撰補助教。

在職十餘年、恪勤如一日。

二十四年一月三十一日歿。享年六十五。葬于藥林寺先塋之次。

長男秀太郎、嗣家。

建碑之舉、發其端者、曰山崎源太郎、曰白根三藏。

皆翁之徒也。

可謂亦不負所學矣。

明治庚子五月

安井朝康撰。

成瀬清書。

西直吉鐫。

●訓詁

飯塚庸盟遺愛の碑。

從四位男爵安藤直行篆額。

庸盟飯塚翁、既に歿して十年なり。

門人故舊胥に謀り、將に其の德を不朽にせんとし、予に囑して之を敘せしむ。
猗嗟、翁、特だに草莽の一民のみ。

其の職を問はば、則ち助教なり。

其の俸を問はば、則ち十金を出でず。

而して門人故舊の惓惓として諉る能はざるは、是れ其の故は何ぞや。

蓋し不朽なる者は、德なり。

苟くも徳有らば、則ち千百世に至ると雖も、可なり。

予、聞く、翁は人となり温恭謙和なり。

名利に淡くして、故舊に厚し。

其の子弟に接して、善く誘ひて倦まず。

ために一郷の推服する所となる、と。

歿して十年、遺愛人に在り。

諸を世の所謂の大官富商の其の生くるや顯榮なるに、其の死するや聞する無き者に比ぶるに、何に啻だ霄壤のみならんや。

君子成人之美の翁の若き者、其れ傳ふること無かるべけんや。

乃ち之を系くるに状を以てして、曰く、

翁、姓は飯塚、名は金太郎、庸盟は其の號なり。

武蔵北足立郡樋爪村の人。

家、世々農を業とす。

幼くして、志趣群兒に同じからず

既に長じて、小堤春盟に従ひて、文學書法を學ぶ。

業成り、塾を開きて徒に教ふ。

遠近來り學ぶ者、數百人なり。

明治五年、天下に令して、郷學を興さしむ。

翁、撰を以て助教に補せらる。

職に在ること十餘年、恪勤一日の如し。

二十四年一月三十一日、歿す。享年六十五。藥林寺先塋の次に葬らる。

長男秀太郎、家を嗣ぐ。

建碑の舉、其の端を發する者は、曰く山崎源太郎、曰く白根三藏なり。

皆に翁の徒なり。

亦た學ぶ所に負かずと謂ふべし。

明治庚子五月、

安井朝康撰す。

成瀬清書す。

西直吉鐫す、

●人物

○飯塚庸盟 文政十（一八二七）年から明治二十四（一八九一）年。

○安藤直行 安政五（一八五八）年から明治四十一（一九〇八）年。紀伊田辺藩十七大藩主。家督相続後まもなく廃藩置県となり、知藩事をつとめた。明治十七年に華族に列し、

同三十年に貴族院議員となる。同三十年に、日露戦争の功により勲四等旭日小綬章を受章。

○小堤春盟 寛政二（一七九〇）年から万延元（一八六〇）年、幼名清吉、号蓮泉堂春盟、通称作右衛門。谷古田領苗塚村の人。名主の家柄で、早くから八条領西袋村の小沢豊功の

寺子屋尚古堂に学び、のち江戸の蓮池堂渡辺文盟に書法を学ぶ。故郷へ帰り、苗塚村名主・谷古田領寄場組合大惣代を勤めるかたわら、屋敷内に手習所を設けて多くの子弟に教授した。

○山崎源太郎、白根三藏、成瀬清、西直吉 不詳。

○安井朝康 安井小太郎（安政五（一八五八）年から昭和十三（一九三八）年。名は朝康、号は朴堂。安井息軒の外孫。一八八二年、東京大学の古典講習科国書課に入学。一八八六年、東京大学を卒業すると、学習院の助教授に任官され、のち教授となる。漢詩文集に「朴堂遺稿」があるが、本碑文は未収録。

●注

- 遺愛 死後に残された仁愛の徳。
- 猗嗟 詠嘆して発する声。
- 草莽 民間、在野。
- 助教 郷学における教員で、教授の補佐的存在。
- 故舊 以前からの知人、旧友。
- 惓惓 忘れがたいさま。
- 温恭 穏やかで慎み深いさま。
- 謙和 控えめでおとなしいさま。
- 推服 尊敬して服従する。
- 大官 官位の高い人。
- 霄壤 天と地。天地ほど隔たりがあること。
- 成人 学問と道徳とを兼ね備えた完璧な人物。「論語」憲問篇。
- 樋爪村 現、川口市南東部の朝日町元町を含む。
- 志趣 こころばせ、意気。
- 文學 学問。ここでは漢学だろう。
- 明治五年 西暦一八七二年。
- 郷學 明治五年の学制のこと。小中大の学校を各区ごとに置くことを定めた。ここでは
- 恪勤 職務に忠実にはげむ。
- 如一日 十年一日。長い間、同じ事を変えることなく繰り返すこと。
- 二十四年 西暦一八九一年。
- 藥林寺
- 塋墓。
- 明治庚子 明治三十三（一九〇〇）年。

●口語訳（章立てと小見出しは訳者が便宜的につけた）

【碑文名】

飯塚庸盟先生が残された仁愛の徳を記す碑。

【篆額】

従四位男爵安藤直行による篆額。

【建碑の企てと碑銘撰文依頼】

飯塚庸盟翁が没して、既に十年になる。

門人と旧友達が相談し、庸盟翁の遺徳を石碑に記して永遠不朽のものにしたいと考え、私にその文章を書くことを依頼してきた。

【在野の人】

ああ、考えるに飯塚庸盟翁は、無位無冠の、ただの在野の人である。

その職業は何かといえば、郷学の助教にすぎない。

その俸禄はどの程度かと言え、十金を超えるものはない。

【仁徳の人】

(そのように、平凡な翁なのだが) 門人や旧友達が、彼のことを決して忘れずいつまでも慕い続けているのは、なぜであろうか。

思うに、人をしてその名を不朽のものにしているものは、その人の仁徳である。

もしも仁徳のある人であつたら、百世千世までもその名は伝わるだろう。

【翁の人となり】

私はこう聞いている、飯塚庸盟翁の人柄は、穏やかで慎み深く、控えめでおとなしかった。

名誉や利益には淡泊で、知人との交わりにおいて手厚いものがあつた。

子弟に対しては、善に導いて倦むことがなかった。

そのため、郷村あげて、彼を尊敬し服従したのだった、と。

【仁徳の人翁と大官富商との隔たり】

翁が没して十年たつが、翁の残された仁愛の徳は、いまだに郷村の人々の心の中に残り続けている。

世のいわゆる「大官富商」と称される人々は、生前はその名が知られ榮譽に包まれているものの、死後はその名を聞くこともなく忘れ去られてしまう。そうした薄っぺらのかりそめの名誉をかぶった連中と、遺徳がいつまでも伝えられる飯塚庸盟翁とは、天地ほどの大きな隔たりがあると言えよう。

聖人君子、学徳兼ね備えた翁こそ、その名を不朽に伝えるべきものである。

そこで、以下、翁の行状を書き記す。

【翁の姓名、出自】

翁、姓は飯塚、諱は金太郎、庸盟はその号である。

武蔵国、北足立郡樋爪村の人である。

家は代々農業を生業としてきた。

【学問志向】

幼いころから、その心ばせは高いものがあり、他の子どもたちとは異なるものがあつた。

長じると、苗塚村の小堤春盟に就いて、学問と書法を学んだ。

【卒業と開塾】

学業を終えると、郷里で私塾を開き、子弟に教授した。

遠近から来たりて学ぶ者が、数百人におよんだ。

【小学校助教】

明治五年、政府は天下に命令して、各地に小学校を建てることとなった。

飯塚翁は選拔されて、助教に補任された。

以来、助教の職にあること十数年の間、毎日変わることなく職務に忠実に励み続けた。

【逝去】

そして同二十四年一月三十一日に至り、亡くなった。

享年六十五歳。朝日町薬林寺の先祖の墓に次いで葬られた。

【跡継ぎ】

長男の秀太郎が、飯塚家を嗣いだ。

【門人による建碑主唱】

翁の遺愛碑の建設について、その企てを主唱したのは、山崎源太郎君と白根三蔵君である。どちらも飯塚翁の生徒である。

翁の教えを受けた弟子として、師匠の名に恥じない行いであると言えよう。

【記事】

明治三十三年庚子の歳五月、安井朝康が撰文した。

成瀬清が書した。

西直吉が雋刻した。

三. 資料

(一)「新編武蔵風土記稿」(文政十三(一八三〇)年)卷之一四〇 足立郡之六

◎樋爪村

「樋爪村は村民或は二十九^{ヒノツメ}村と記せり、江戸より行程四里半、……東西四十五町、南北死地八町、南北へ貫きて日光御成道係れり」

…寺院

○薬林寺

「新義眞言宗、川口町錫杖寺末なり、瑠瑠山と號す、……當寺は古は芝川の堤外にあり、其頃は大伽藍なりしが、天正年中岩槻落城の時落人共來りしにより村民つどひて堂宇を打こぼてり、此後再造の時今の地へ移せしと云」

四. 主な参考資料

①翻刻

・なし

②論文など

・なし

以上

二〇二五年四月 薄井俊二訳す